

ラウンドテーブルⅦ報告

障害児教育において音楽はどのような意味をもつか—中・高等部—

齋藤一雄（埼玉大学教育学部附属養護学校）

このテーマは、昨年度から引き続いている。

昨年度は、音楽教育の目的は人間形成にあり、小・中・高等学校の音楽教育と何ら変わるものではない。しかし、障害児の音楽教育は、音楽そのものの指導の面と音楽活動を通じた養護・訓練の領域の指導の面をもち、教師は両者のねらいの違いをおさえつつ、音楽教育によって総合的に子どもの発達を促していく大切さが指摘された。

今年度は、実際の音楽の2つの実践を通して、中・高等部の生徒にとって音楽のもつ意味、音楽教育の意味を考えることにした。

1. オペレッタを通して育ったもの

(大阪府・山本真弓)

養護学級のM子が音楽部に入部してきた。M子は、自閉的傾向があり、おこるとつねる、集団場面を嫌う。でも音楽が好きで、クラブには休まず参加していた。M子が3年生になったとき、M子を生かし、音楽・言葉・身体・表情・コミュニケーションなどを高めるオペレッタに取り組んだ。

部員は忍耐強くM子を教え、M子は素直に休まず練習に取り組み、その姿を見て感動した部員とM子との心が通うようになった。M子も自分の居場所を見つけ、部員との人間関係もできた。また、言葉が明確になり、表現ものびのびしてきた。健常の部員たちも相互啓発しあい、他を思いやる気持ちが育っていったのがみえた。

2. 卒業後も音楽活動を楽しめる授業づくり

(富山県・山本富士子)

養護学校高等部の生徒の実態から、彼らが興味のある音楽と表現できる音楽に違いを感じた。

そこで、幅広く教材研究を行うとともに、興味のもてそうな楽器を購入した。

授業も、ちょっとがんばれば参加できるアンサンブル(リレー奏や分担奏)、ソロの順をくじ引きで決めて歌う歌唱、一人ひとりのよい表現を認めるダンス・身体表現などで構成した。

その結果、その時間の個人目標が明確になり、表現する力も高まり、一人ひとりの出番ができ、認められる場面が多くなった。卒業後も、キーボードのアンサンブルに参加する姿も見られるようになった。教師も、子どもの意欲や小さな変化も評価できるようになっていった。

3. 討議

障害児は、一人ひとりプライドをもっていて、彼らの表現をみんなで認めていくことが大切である。そこに、オペレッタの有効性があった。

同一空間で相手の呼吸、間をはかることが必要であり、みんなで一つのものを作り上げるという総合的な取り組みができるという意義があった。

そして、音楽を通して、コミュニケーションや人間関係、表現が自然と高められる。自分以外のものになることができる。表現の壁を自然と乗り越えさせてくれる。これらの大切さも音楽の持つ意味ではないだろうか。

また、自分の好きな音に出会う、興味のある音楽を見つけ出す、自分の言葉や音楽で表現するなどの活動を通して、授業での一人ひとりの目標が明確になり、それぞれの出番を作り出すことができ、お互いによいところを認め合い、みんなのものにすることによって、人間形成としての音楽のもつ意味が深まっていくのではないだろうか。

さらに、一人ひとりが満足感をもち、意欲の向上が見られるようになると、卒業後の生活にも音楽が重要な意味をもって位置づくのではないか。

以上、今回のラウンドテーブルⅦでは、20人の参加者が文字通りテーブルを囲み、2つの実践事例をもとに、まだまだ十分とはいえないが、音楽のもつ意味を討議することができた。